

引き返すことにする。

この沢は、中間点あたりまで伐採され、おまけに沢は木で埋まっており、歩きにくい沢であった。

## 焼枯沢

シ若  
一九八四年七月二一日

赤倉ノ沢に入る西・渡辺パーティと一緒に中津川林道ゲート手前まで行き、車をデポして、あとはひたすら林道を歩き続ける。二時間半かかって、やっと林道から解放される。

焼枯沢の出合は林道からは見えない。そこで、少し先に進んで、中津川がみおろせる所から下に降りて、沢を少し下降して、焼枯沢の出合に着く。

さて、ワラジを水にひたして履き、

(記)

「タイム」 左俣出合(九:二〇)↓右  
沢分岐(一〇:二五)↓終了(一〇  
:四五)

若林氏は一服ふかして、九時いよいよ遊行開始。

実はこの焼枯沢、うわさによると「なんもない」という評判で、若林氏と私は、「カスにはカスしかまわってこないのネ」となどと、いじけていたのである。

アプローチばかり長くてカラだった(焼枯沢なんて、名前もあんまり良くない)では、ますます暗くなってしまうので、そこは三十路の迫力

コンビ、なんとか二重丸の三段滝あたりを出現させましょと、がんばって出発。

ところが、しょっぱなからクマの足跡と食跡らしきものを発見。この辺はクマやらカモシカやらが豊富だと聞いてはいたものの、さすがにこわくなり、ワアワア叫んだり、歌ったりしていったので、どうやらこの日の対面はまぬがれた。

さて、出合から五分位、右手にスラブが続く。しかし、川幅は二メートルくらいなものだから迫力に欠ける。小滝二つが出てきて、その先は五〇メートルのちよっというナメが続く。

「何だかこの先、ほんとに何も出てこないような感じだねえ」などと話しているうち、二つの小滝を越えた先に七段の階段状滝が出現。水ゴケですべるので、左側の水際を登る。

九時二五分左岸から支流が合流。

その先右岸から支流が合流する所までは、ちよつとしたゴルジュのミニチュア版。そしてその先、小滝をまじえて軽快なナメが五〇分程続く。大きな滝がないと、その分ちよつとした変化が結構気分を左右する。

さて、今日の二人の気分。若林氏といえば、昨晚テントで蚊の大歓待を受け、あちこちキスマークが目立つ(四五ヶ所も刺されたとか)。私も蚊は勿論のこと、テントの中で面脇からイビキと歯ぎしりでもてなされたうえ、食当で四時起きだったから、何となくモーローとしている。

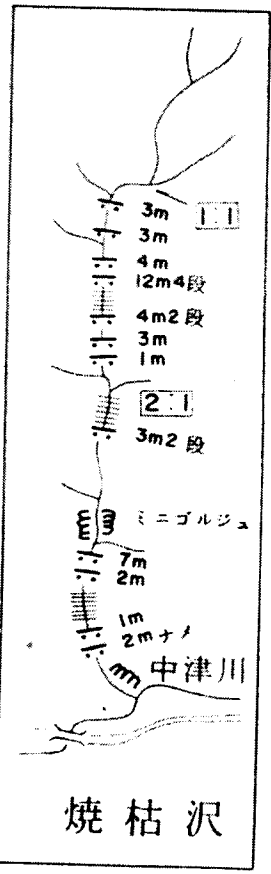
ところが、次の四段二段滝を越えて五分程進んだ所で、突然トップの若林氏がすごい声をあげた。「なぬクマか?」と思いきや、これがほんとうにうれしや、一二段の滝が出現し

たのである。

この滝はちよつと変わった形で、真中へんをちよつど水が横切ってト

イ状に流れている。スタンスもホルドも充分。三段に見えるが、登ってみると四段になっている。ともかくも大喜び。思わずにんまりしつつ、一步一步、岩と水ゴケの感触を楽しみながら直登。この辺が本日のハイライトで、この先も小滝の連続。やがて鋼木のなだれ込みが多くなり、沢幅も次第にせばまってくる。そろそろツメである。一〇時三五分

二俣にさしかかり、地図で地形を確かめて左ヘルトをとる。すぐまた二俣となり、今度は右へ入る。ここらあたりで特筆すべき点は、小規模ながら完べきに丸くえぐれた



幅も高さも一二段のおかま状滝である。だいたいは何なく越えられるが、最後の一つがどうしようもなく木に飛びついたところ折れて、おかまにはまってしまった。再度木をつたって登ったが、この完べきに丸くえぐれた形は、何か名のあるツボなど連想して、個人的にかなり気に入ってしまった。

さてこのオカマ滝帯を登りきると、水は涸れ、急登となって、豪士山東側の小ピークのそばに飛び出した。

(記) 「タイム」 焼枯沢出合(九:〇〇) ↓

遊行終了(一一:一五)